

山本泰次郎先生 告別式 式辞 一九七九年三月二十七日

はなはだ僣越ではありますが、先生のご遺志に従いまして、式辞を申し述べさせていただきます。

山本泰次郎先生は、一九〇〇（明治三三）年九月二十日神奈川県片瀬にお生まれになり、昨日、一九七九年三月二十六日午前五時五十分、心筋梗塞のため、ご自宅に近い救急病院で永眠されました。

先生はその若き日、東京高等工業高校（現在の東京工業大学）紡織科に在学中の一九二〇（大正九）年一月二十五日、初めて東京大手町の内村鑑三先生の聖書講演会に出席され、そこで初めてキリスト教に接しられました。それから程なく関東大震災後に、十字架の贖罪の福音に救われて新生の喜びに躍られたのでありますが、その時以後、昨朝神のみ許に召されるまで、この信仰によって七十九年の生涯を貫かれたのであります。

先生は高等工業ご卒業後、農商務省（現在の通商産業省）に奉職されましたが、一九三一（昭和六）年、金解禁事件に伴う官吏減俸反対運動というのがありまして、これに反対してその職を辞し、専心聖書の研究に従事する決意をされ、折から始まった岩波書店の『内村鑑三全集』の校正を手伝うことを契機に、キリスト教の独立伝道に立たれました。以来四十余年、「聖書講義」四月号の原稿を綴るペンが、文字通りその手から落ちるまで、一貫して文筆による福音宣伝にその生涯を捧げられたのであります。いま「一貫して文筆による福音宣伝」と申しましたが、これは決して形容ではありませんで、先生は聖書の研究と、十字架の福音を文筆によって語るこのほかは、ほとんど何もされなかった、と言ってよい生涯を送られました。地方伝道、あるいは講演のようなものは殆どなさらずに、ひたすらペンによって福音を宣べ伝えられたのであります。

先生の文筆による伝道は、申すまでもなく、月刊誌「聖書講義」に拠ってなされました。「聖書講義」は一九三四（昭和九）年九月に創刊され、来月、四月号で四〇五号を教えることになりました。その体裁は時期によって必ずしも一定しておりませんが、大きく分けまして巻頭言、聖書講義、日誌の三つの部分から成っております。巻頭言は天来の黙示をそのままに綴った福音的慰めのことばで、先生の聖書の研究が凝縮して成った信仰所感文であります。末尾には「東京だより」と題する日誌がございますが、これは福音的信仰に基づく広い視野と確かな見識と深い洞察とによって綴られた、先生の信仰的日常の記録であります。それは同時に、日本のみならず全世界を見すえて展開された文明評論でもあります。

そしてその真ん中に、「聖書講義」の中心である聖書講義があります。山本先生の聖書講義は、何よりも堅固厳密な学問的研究に支えられた、講義の名にふさわしいものであります。しかし、それは講義が得てして陥りがちな訓教的注釈の類ではなくして、先生の信仰そのものの明確な表白であります。講義と信仰との間にいささかの乖離もないところに、先生の聖書講義の力の秘密があることは、私どものよく存じているところであります。また先生の聖書講義は、人生の厳しい体験と豊かな常識とにうら打ちされていることを特徴とします。しかもそれが見事に昇華されて、言葉本来の意味で霊的（スピリチュアル）な講義になっています。先生の聖書講義は、また徹底的に聖書的であります。従ってその講義は一面きわめて厳しく、鋭く人の肺腑を刺してやまないものがあります。しかし多面、先生の聖書講義は、内村先生の言われる「人のためにする伝道」の情熱と、読者に対する福音の愛とにあふれたもので、その文体は簡潔明快、その注解は懇切でいねいで、罪の苦しみに泣く者、イエス・キリストの十字架による救いを慕い求める者、天国をあこがれ望む者に、実に深い慰めと力強い励ましを与えるのであります。

この先生の聖書講義は、処女作『ダビデ伝』に始まって、ヨブ記、使徒行伝、エレミヤ書、ローマ書、ガラテヤ書、マタイ伝、ヨハネ伝を経て、ヨハネ伝、詩篇、黙示録に至り、これらの多くは単行本として上梓され、ついに一年程前に『山本泰次郎聖書講義双書』全十五巻としてまとめられたのであります。

山本先生のことを申し上げるときに、先生と内村鑑三先生との関係を語らないわけにはまいりません。先生は自ら書かれた略歴の中でこう言っておられます。

一九三〇（昭和五）年三月、内村先生の永眠にあい、天涯の孤児となる。爾後なにびとも師事せず。この言葉の中に私は、先生が内村先生に対してどんなに深い思慕敬愛の念を抱いておられたかを、感じざるを得ません。

それにもかかわらず先生は、内村先生から教えられた独立の精神のゆえに、内村先生が亡くなられてから長い間内村先生の著作をほとんど読まなかったと申されます。それが一九五五年三月にいたって、即ち内村先生の永眠四半世紀後に、先生はただ独り立って「内村鑑三先生永眠二十五周年記念講演会」を開き、初めて公に内村先生について語られたのであります。その時先生は、内村先生のキリスト教がいかなるものであるかを解明しようとして、「内村と科学」「内村と非戦論」「内村と無教会主義」「内村と十字架の福音」と題して、四夜にわたって講演されました。そうしてここに先生は、内村先生が亡くなられてから二十五年、初めてキリスト教に接してから三十五年、その半生をかけて、涙の苦闘のうちに探り求めてこられた信仰の真髓が、ことごとく内村鑑三のキリスト教であることを発見し、喜びに躍られたのであります。そうしてそれ以後は、誰はばかるところなく、恩師内村先生について語られたのでした。先生は内村とパウロについて語られるとき、自分

いついて語っているのか、彼らについて語っているのかわからなくなってしまわれる程でした。恐らく山本先生ほどに内村鑑三について語り、かつ書いた人はほかにない、と言って決して過言ではないのであります。

先生は一九六〇年から七三年にわたり前後十年の余をついやして、教文館版の内村全集すなわち『内村鑑三聖書注解・信仰著作・日記書簡・英文著作全集』全五十七巻を編集しておられます。これは内村鑑三のキリスト教を一望のもとにおさめ得る整然たる伝道的編集でありまして、極めて独特なものであります。先生の内村鑑三論は、先程申し述べた講演会の要旨を取めた『内村鑑三の根本問題』をはじめ、ベルおよび官部書簡による内村伝を含む（東海大学出版会の）『内村鑑三―信仰・生涯・友情』、内村全集各巻の「解説」、聖書講義双書別巻の『内村鑑三論集』などとなって結実したのであります。

山本先生は内村先生に、その晩年十年、親しく師事されました。しかし先生の師を知る知り方は、「肉によって」ではなく、霊によるものであります。それだけに、先生の内村理解は深く、かつ純正でありました。啓蒙期の人にふさわしい内村先生の広さと、かたくななまでに狭い山本先生の狭さとは、一見対照的でありますが、実は先生こそ「グレート・エックス」とまで言われた内村鑑三のキリスト教の中心を、その狭さをもって深刻に把握し、その狭さの中に正確に明示されたのであると信じます。

次に先生の信仰について申し上げます。山本先生の信仰は、何よりも実験と事実の信仰でありました。特に人生の苦難と悲哀の体験によって深められた信仰であったと存じます。先生みずから言われるように、

病苦、Ⅱ先生がその為についに倒れられた心筋梗塞も、これは十四年にわたる持病でありました。そのほかに先生は若い時に結核を患われ、また生涯腰痛に悩み、胃病に苦しみました。

貧苦、Ⅱ 独立伝導に当然伴う貧苦であります。

失敗、Ⅱ 先生の失敗は、たとえバギリシヤ語辞典編集の挫折のような、壮大な信仰的失敗であります。

失意、Ⅱ 失敗に伴う失意。先生のように万事に有能な方は、失意の底に沈まることがどんなにかしばしばおありだったかと拝察されます。

誤解、Ⅱ 先生が余りにも公明正大であった為に、かえって人に誤解されることも多々あったと存じます。

疑察、Ⅱ 信ずることに厚い先生は、また疑うことも強くあられたのでありましょう。

孤独、Ⅱ 先生こそは人間の孤独ということと、その悲しみを本当に知っておいの方でありました。

などの苦難と悲哀によって、特に愛する家族たち、Ⅱ 活子前夫人、ご子息望さん、ご息女啓子さんを天国へ召されたことよって、

このような数々の悲痛な経験を通して、先生は

初めてキリスト教は聖霊と天国と来世の教えであることに気付き、復活と再臨と奇跡などを文字通りに信じていることができるに至られたのであります。

苦難によって深められた(ビュリアイド)先生の信仰は、実に純粹(ビュアー)でありました。その純粹さは、すべて物事をその本質において観る、本質的なこと以外は断然これを切り捨てて顧みないという強い意志と、すべての物事の根本を明らかにしなければやまないという激しい情熱とにおいて明瞭にあらわれました。ですから先生は常に、あらゆる問題を宗教の本質においてとらえ、信仰のすべての問題をキリスト教の根本に照らして論じられたのであります。ここに先生の信仰の特質があると共に、先生の信仰の戦いもまたここにあったのであります。

敢えて申しますならば、このことは特に先生の「無教会主義」に対する厳しい批判によくあらわれております。こんにち内村鑑三の無教会主義と塚本虎二の無教会主義に相違があることは衆知のことで、先生以外にもそのことを指摘している人は少なくないのですが、この相違を十字架の贖罪の信仰にかかわる根本問題として、あるいは宗教の本質にかかわる究極の問題として、これを論じておられるのは恐らく山本先生だけでありましょう。その主張の余りにも深刻かつ純粹であるために、先生の言われるところは必ずしも人に容れられるところとはならなかつたかも知れません。しかし私は、この問題は五十年、百年のうち、すべての事が少しく客観的に見られるようになったときには、先生がこの問題を通して明らかにしようとした真理、すなわち十字架の贖罪の福音の本質は、必ずや日本のキリスト教のこの時代の一つの貴重な証言として顧みられ、また次の時代のキリスト教に福音の真理を新しく提示するものになる、と信じて疑いません。

何にしましても、先生の信仰と先生の生き方の全体が、無教会主義を否定するほどに、徹底して無教會的であったことは申すまでもありません。内村先生の言葉で言いますならば、先生は終始「形」と戦い、これを捨てて、ただひたすらに「神」に生きたのであります。

山本先生は常に私共に、先程の福田君の祈りにもありましたように、「信仰の根本において何が一番大切であるか」を教えて下さいました。それは十字架の贖罪の福音であり、天国の信仰であり、キリストと共に生きる信仰生涯であります。内村先生の言葉で言えば、「キリストと共に起き、キリストと共に働き、キリストと共に眠りにつく」、ただただイエス・キリスト中心の信仰でありました。

ここで、この先生の信仰の真髄について、先生ご自身に語っていただくように存じます。これからお読みする「平安の道」と題する一文は、「聖書講義」今月号の巻頭に掲げられたもので、そこに引用されている聖句は、

先生がご遺言の中に葬儀で読むようにと指定された箇所と奇しくも全く同じもので、先程朗読されました「ガラテヤ人への手紙二章一九、二〇節」であります。従ってこれは先生の信仰生涯の総括であり、それに基づいて表白された先生の信仰の中心でありまして、まさに私共に対する先生の遺言と受けとるべきものであると存じます。

初め、わたしはキリストの十字架の福音、即ち贖罪を信じる信仰さえ得られれば、と必死に努め、励んだ。そして苦闘幾年の後、わたしはようやく十字架を仰いで、その前に信仰を告白することができた。わたしは天地におどるほどの喜びに酔った。そしてはや、ほかには、何もいらぬとまで思った。

しかしその喜びは長くは続かなかった。わたしは再び不安と悲しみの人となった。自分がまだ真の平安を得ていない事に気付いたのである。わたしは再び霊の苦悶の人となった。その苦しさは以前のそれにまさる幾層倍であった。それから十余年、わたしは平安なき、世にも哀れなキリスト信者であった。

しかし恵み深き父なる神は、わたしを見捨て給わなかつた。神はわたしの祈りに答えて、わたしを救って下さった。神は新しく十字架のキリストを、わたしに現して下さった。わたしは新しく十字架上のキリストを仰ぐことができた。しかしそのキリストは、わたしの罪の贖い主としての贖罪の教義をもって信じるキリストではなかつた。わたしのために十字架上に死んで下さり、(そしてわたし自身も彼と共に十字架上に死に)今、復活して、わたしのうちに生きておられる、生けるキリストであった。その時、わたしは生まれ初めて、言い知れぬ平安に満たされた。わたしはついに救われたのである。

それから幾十年、わたしはただこの信仰——わたしのうちに生きておられるキリストと共に生きる信仰に

よって、平安と歓喜の生涯を送って来た。そして日ごとに、天国で生ける主に親しく会いまつる日の希望を強められつつ、他には何の望むところもない喜びの日々を送りつつある。

故にわたしは自分を見ない。他人を見ない。世を見ない。自分の罪や欠点や失敗に心を奪われない。他人の批判や非難を意に介さない。世の暗黒や混乱に心を乱されない。ただわたしのうちに生きていて下さる主を仰ぐ。そしてわたしは平安であり、この上なき幸いな人間である。わたしはついに平安の道を示されたのである。

わたしの救いは、十字架の贖罪の教義ではない。その教義を信じる信仰ではない。生けるキリストご自身である。今復活して、天上に神の右に座しつつ、わたしのうちに生き給い、既に死んで無となったわたしとなつて下さったキリストである。

先程も申し上げましたように、先生は十四年前の一九六五年七月に、心筋梗塞で倒られました。何分病気が病氣でありますから、私共一同先生のご快癒を祈りつつも、いつ万一のことがあつても驚くには当らない、との覚悟もできている積もりでございました。しかし先生は、ただただ福音の仕事のために、実によく摂生に努められて、この十四年間に、ご病人としては驚くべき量の仕事をしてこられました。特に精神的にはいささかの衰えも見せられず、実に若々しくしておられるので、いつしか私共は先生がまだまだお元気で、福音宣伝のために働いて下さるとの間違いこんでいたようであります。

およそあとを顧みるということをされなかつた先生もまた、皆様がいまお座りになつておられるこの部屋を最近増築されまして、ご病身の奥様と共に、身边を整理して、もう一度新しく働こうとしておられました。

年来の念願であられた「書簡による内村鑑三伝・三部作」の最後の一卷である『斎藤宗次朗あての書簡による内村鑑三』を、昨年脱稿された先生は、残される時日がありましたならば、恐らくひたすら聖書の注解講解にすべてを傾注されたことでありましょう。

そのことを神はお許しにならずに、突然に先生をお召しになりました。あたかもエノクのように、先生は「神とキリストともに歩んで」おられました。「神が先生を取られたので」、先生は私共の中から「いなくなつて」しまわれました。先生は信仰の戦いを立派に戦いぬいて、永遠の休みに入られたのであります。その死は、真理の働き人にふさわしい「イン・ハーネス」の名誉ある死でありました。今や先生の前には、義の冠が待つのみであります。

しかしながら、地上に残された者の悲しみ大きくありました。奥様をはじめ、ご家族、ご親族の皆様のお悲しみはいかばかりでありましょう。私共、先生に聖書を教えられ、福音を学び、信仰を養われ、信仰の人生を導かれてきた者もまた、先生が内村先生の永眠に際して抱かれたと同じ、「天涯孤独」の思いに打ちひしがれております。神は最善の時に先生をお召しになったのだと信じつつも、先生がもう少し私共と共に居てくださって、福音の慰めを語りつづけていただきたかったと、かなわぬ願いをくり返さざるを得ません。

しかし先生は、ここにもまた、あたかも此の日あることを予見されていたかのように、先生との死別を悲しむ私共を慰め励ます言葉を書き残して下さいました。それは、先程のお祈りの中にもありました、また昨晩の集まりで私も読みました、「聖書講義」二月号巻頭の「死の意義」という一文です。そこに先生は

死は、生命の終わりである。ゆえに死別ほど悲しむべきことはない。

しかし死は、実は、新しい生命―天国の生命の始まりである。故に死は、実は、これにまさる喜びはないのである。

・・・信者にとつては、死は、実は、天国への門出であり、かしこにキリストに会いまつるための旅立ちであり、天国で神のみ許に永遠の新しい、輝く生命に入る希望へ向かつて飛び立つことである。生涯の信仰と希望と祈りとが、ついに叶えられることである。こんな目出たい、喜ぶべき事はないのである。故に信者にとつては、死の悲しみは歓喜であり、涙は悲しみの涙ではなく喜びの涙であるべきである。

これがわれらキリスト信者にとつての死の意義である。

故にわれらは、生前から常に天国を望んで信仰に励み、死に直面して徒らに悲しみ嘆くことなく、むしろ喜び勇んで、天国へ凱旋すべきである。また愛する者を送る者も、徒らに信仰なき者のように、嘆き悲しむことなく、涙の中にも、愛する者の凱旋を祝い、喜び、感謝しつつ、送るべきである。

それでありますから、私共も「信仰なき者のように徒らに嘆き悲しむこと」をいたしませんまい。先生は常々言っておられました。人は天国に行つてから本当に働くのである。特に地上に残された者のために執成しの祈りをするのである。いまや先生もまた、すでに神のみ許にあつて、ここにこうして集まつている私共ひとりひとりの為に祈つて下さると信じます。そして、これからの私共は、天国から、いままでいつもそうであつたように、あいかわらず発行日厳守で、毎月毎月「聖書講義」を送り届けられることでしょう。

ゆえに私共は、山本先生の「死」は、私共の間における「新しい生命の始まり」であることを信じ、先生の天国への凱旋を心から祝い、喜び、感謝いたしまして、この大いなる悲哀の歓喜を私共にお与え下さいました

父なる神の御名を、共々にあがめたいと存じます。

(一九七九年三月二十七日)

(所載) 『山本泰次郎聖書講義双書 追加巻2 回想と追憶』

キリスト教図書出版社、一九八一年